ダッシュ

在庫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダッシュ

【Ｎコード】
Ｎ６５９７Ｅ

【作者名】
在庫

【あらすじ】
もう、なんなのよ。イヤ、イヤ、もうイヤだっ！由香里は校門から続くこの道をまっすぐに走る。

もう、なんなのよ。イヤ、イヤ、もうイヤだっ！！

街がオレンジ色に染まり、人もカラスも自分の家へと帰るころ、由香里は形振り構わずガムシャラに走っていた。どこへ向かっているのか、当の由香里でさえ分からない。遠くまで続くこの一本道を、ひたすら走るだけだった。いや、逃げているといったほうが正しいかもしれない。

それを目撃したのは、今からほんの数分前。
部活が終わり、いつも一緒に帰る友人は今日に限って部活に参加しておらず、1人で生徒玄関にむかった。ゲタ箱はクラスごとに分けられており、由香里のいる1年1組のゲタ箱は1番奥にある。そこは日があまり射しこまない死角なので、怖がりの由香里にとっては不気味な場所。

「茜ちゃん、なんでいないのぉ～」

由香里は自分をさっさと置いて帰ってしまった友人に、聞こえもしない文句を呟いた。さっさと帰ってしまおうと、早歩きで自分のゲタ箱へと向かった。
1番奥のゲタ箱に辿りついたとき、影らしきものが由香里の視界入ってきた。

「――――っ！！」

「オバケっ！！」と叫んでしまいそうになった口を、とっさに両手で押えこみ、隣のゲタ箱の物陰に隠れた。由香里は深呼吸を数回くりかえり、　オバケなんかいませんよーに！と強く念じながら、もう一度1年1組のゲタ箱のほうをのぞいた。
そこにいたのは、オバケではなかった。

「あ、伊波くんと落合さんだ……」

2人はゲタ箱を背もたれにしながら、楽しそうに会話をしていた。伊波くんも、落合さんも由香里の同級生だ。

「そっかぁ、伊波くんと、落合さんか。うん、オバケじゃない、ね」

オバケじゃないと分かれば、さっさと自分の学生番号の書かれている場所に行けばいい。2人とも同級生なんだし、特にきおいすることはない。
なのに、由香里の足は一向に動こうとはしなかった。

心臓がバクバクとうるさいくらいに鳴り響き、頭がガンと殴られたように痛かった。視線があっちへいったりこっちへいったり。しかし、耳だけはやけに2人の会話に集中している。

「……なぁ、縁（ゆかり）」

伊波くんのまだあどけなさが残るテナーボイスが聞こえる。体が沸騰するかと思うほど火照ったが、すぐにサーッとどこかへ飛んで行く。
伊波くんは溶けるような甘い笑顔で、落合さん―落合縁さん―をみつめていた。あの囁きは私ではなく、落合さんへのモノ。伊波く

んは落合さんしか見ていない。

由香里は自分の勘違いに気づいた瞬間、あまりの恥ずかしさにいてもたってもいられなくなり、気がついたら上靴のまま走って玄関を飛び出した。バタバタと大きな音がした。2人に自分がいたことが気づかれたと思うと、さらに恥ずかしさがこみ上げてくる。

由香里は頭がぐちゃぐちゃにこんがらがって、ただ夢中に校門から続くこの道を走り続けているのだ。

頭の中ではいろいろなものが駆け巡り、まとまらない自分の思いに由香里は苛立ちを隠せない。

もう、なんなのよ。イヤ、イヤ、もうイヤだっ！！

2人のことを思い出すと胸が締め付けられるようで、まともに呼吸もできなかった。

どんなお菓子よりも甘そうなあの笑顔が脳裏からはなれず、一層由香里の心はグルグルと円をえがくだけ。

立ち止まってしまうと、もっともっと深く考えが落ち込んで行きそうで怖かった。しかし、それ以上に、あの2人から1歩でも遠くに行きたいと由香里は思った。

さらに時間は過ぎ、空に1番星があらわれたころ、由香里の体力も限界で、とうとう道端に大の字で寝そべってしまった。

「伊波くんと落合さん、やっぱり付き合ってたんだ」

それほど都会ではないこの街でも、星は数えるほどしかみえない。人通りも民家も少ないところまで来たというのに、心がまっさらになるような風景には出会えなかった。

「仲、よさそうだったな」

2人のじゃれあうような姿が、まぶたの裏に焼きついてしまった。

「オレ、手伝うよ」

高校に入学したばかりのころ、日直で先生の雑用をこなしているときに、伊波くんが声をかけてくれた。みんなに配るプリントを教室に運ぶだけで、枚数もそんなになかったから、そのときはお礼だけ言って、手伝いは断った。

でも、まだよくお互いのことをしらないのに、積極的に声をかけてくれたのが由香里には嬉しかった。

なんとなく、伊波くんが気になる日々が続いたけど、1か月くらいたったときに、伊波くんは落合さんと付き合っていると茜から聞き、そうなんだとちょっと残念だなと思ったことは覚えている。

由香里にとって、伊波くんはへの想いはその程度だと思っていたし、それ以後、伊波くんのことも気にならなくなっていたというのに。

今さらだ、と由香里は思った。もう、あの恋は終わったはずなの

に。頬には水滴が流れる。

「駄目だよなぁー」

あんなに仲良さげな2人ははじめてみた。いつもクラスの中ではお互いの友人と行動をともにしている。

それだけでも、ショックなのに。

ユカリ、なんて甘ったるい声で囁いて。

その囁きが自分のものになればいいと、思ってしまった自分。

また、由香里は走り出した。

顔をぐしゃぐしゃにしながら、泣きながら由香里は走る。

失恋してからはじまった恋に、どうしようもなくどまどう由香里は、走って紛らわすことしかできなかった。

もう、なんなのよ。イヤ、イヤ、もうイヤだっ！！

自分の恋心すら気付かなかった自分、自分のモノじゃない伊波くん、伊波くんを手に入れた落合さん。

みんな、みんな、イヤだった。

泣いて、泣いて、走って、走って。

泣きつかれて、走りつかれたら、この恋が終わればいいと由香里は思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6597e/

ダッシュ

2011年1月23日14時38分発行